

2018年に開催された第10回浜松国際ピアノコンクールにて第2位、併せてワルシャワ市長賞、聴衆賞を受賞。2019年3月には出光音楽賞を受賞。1999年福島県いわき市生まれ。父親の転勤に伴い生後すぐ上海に移りピアノを始める。2005年(5歳)、第2回上海市琴童幼几鋼琴電視大賽年中の部第1位受賞。2008年〜2012年(8歳〜12歳)、シヨパン国際ピアノコンクールでASIAにおいて5年連続第1位受賞。2012年(12歳)、第16回浜松国際ピアノアカデミー・コンクールにおいて最年少1位受賞。同年、日本人ピアニストとして最年少(12歳)でユニバーサル・ミュージックよりCDデビュー。「想い出」(2012年)、「献呈」リスト&シヨパン名曲集(2013年)、「ロイメライ」ロマンティック・ピアノ名曲集(2014年)、「愛の喜び」(2015年/レコード芸術特選盤)、「展覧会の絵」(2014/レコード芸術特選盤)と続き、2019年3月には最新CD「シヨパン・バラード第一番、24の前奏曲」をリリース。各地でのリサイタルに加え、シュテファン・ヴラター指揮ウィーン室内管(2015年)、ミハイル・ブレトニョフ指揮ロシアン・ナショナル管(2015年/2018年)、小林研一郎指揮ハンガリー国立フィル(2016年)、ヤツェク・カスプシク指揮ワルシャワ国立フィル(2018年)各日本公演のソリストを務めている。

モスクワ音楽院ジュニアアカレッジで指導を受けたロシア人教師について思い出に残っているエピソードやアドバイスを聞かせてください。

13歳から研究生として在籍し学ばせていただきました。自分にとって本当に貴重でかけがえのない経験だったと思っています。

初めてユリー・スレサレフ先生にレッスンをいただいたとき、言われたのは「基礎的なことから熱心に勉強しなければ」ということでした。その後のレッスンでは和声や形式、正しい手の使い方、作曲家のスタイルなどの基礎的なことから、大きなホールでどのように音を響かせるかといったコンサートで求められる技術まで、音楽家として必要なことを一から学ばせていただくことができました。

アレクサンドル・ヴェルシーニン先生は楽譜に対してもとても厳格な先生でした。どんな些細な指示も和声の変化も疎かにしないこと、そしてその指示

モスクワ音楽院の先生たち

が書かれた意味や背景を必ず理解することを求められました。同時にそれらを可能な限り自然に実現する方法、術学的にならないよう遊び心を含ませるアイディアをたくさん教えていただきました。

アルチョム・アガジャーノフ先生のもとは、ベートーヴェンのソナタやロシアの代表的な作品を集中的に学びました。いまでも定期的にレッスンをいただいています。スケールの大きな音楽性、作曲家的な視点からの楽譜への深いアプローチにいつも圧倒されています。

数ヶ月おきに色々な先生が来日されていましたが、もちろん先生ごとに作品に対する考え方に違いがあるもの、核となる部分は共通しているように感じました。和声の扱いを注視する先生、構成感を重視する先生、音色やパランスを気にする先生などそれぞれ視点が少しずつ違って、同じ作品を複数の先生にレッスンいただくというアプローチの違いを感じることができてとても興味深かったです。

倉敷での自然に 囲まれた生活

13歳から18歳までの5年間、倉敷市にも拠点をおいてレッスンを受けていらっしやいまして、音楽を学ぶ上で倉敷という街はいいがでしたか？

大学がある玉島地区の豊かで壮大な自然に囲まれた生活は、それまで都会でしか過ごしたことなかった自分に大きな刺激を与えてくれました。朝は鳥の鳴き声で目を覚まし、昼は蛙の鳴き声聞きながら通学し、夜は鈴虫の鳴き声聞きながら眠りにつく毎日。空はいつも本日に美しかったし、近所の沙海岸まで数時間かけて海を見るだけのために歩いたこともありました（ちなみにここはロシアの先生もお気に入りだそうです）。初めてあの大自然を目の当たりにした時の胸が締め付けられるような感覚は今でも忘れられません。ペートーヴエンやショパン、ラフマニノフなど、田園的な情景や人

間が太刀打ちできないような自然の偉大さを表現した作曲家は数多くいます。そういったものを自分の中に原体験として持てたことは大きな財産になりました。また都会と違って大学付近には、練習を妨げたり誘惑になりうるような環境があまりなかったので、思春期真っ只中の自分にとって最高の環境だったと思います。

また大学への道程にある「イヴ」という喫茶店がお気に入りです。昼食を食べに行っていて、先生方と一緒にマンションを借りて練習室にしていたので、通学の時にすれ違ったり、買い物と一緒にいたり、アガジャーノフ先生が風邪をひいたときは家でスーブを作って持って行ったこともありました。先生方が夜にラフマニノフを練習しているのが聞こえてきたり、大学に向かう坂道を自転車で颯爽と駆け上がっていくのを見て驚いたり・・・距離をとっても近く感じられたことも良い刺激でした。

モスクワにもよくレッスンを受けていきますが、倉敷で先生方と身近に接しているせいか現地でもあまり違和感を感じることはありません。

3 MOUSQUETIERS

ディスクlavierを使ったモスクワとのリモートレッスンを実際に体験された具体的な感想をお聞かせください。

最も大きな利点は自分と先生が同じピアノを使って演奏するのでダイナミクスや色彩の感覚を直接体感できるということです。同じピアノだからこそ先生と自分の出す音の違いを目の前で感じられ大きな刺激になります。無意識に先生と同じ音や演奏を耳が求めるようになったのは大きな収穫でした。タイムラグもほぼなく、リズムや音量が歪むこともほぼありません。



©Ariга Terasawa



CD 2019年3月20日発売
ショパン/バラード第1番、24の前奏曲
発売元:ユニバーサルミュージック



CD 2016年9月14日発売
展覧会の絵
発売元:ユニバーサルミュージック



CD 2015年6月24日発売
愛の喜び
発売元:ユニバーサルミュージック

困難な時期に 音楽を学ぶこと

4

2000年から始まったモスクワ音楽院とくらしき作陽大学の文化交流も20年が経ち、昨年はこの

20周年記念イベントとして春にはモスクワ音楽院のソコロフ院長を招いた記念講演会と牛田さんの先生であるオフチニコフ教授、スレサレフ教授などの連続演奏会、そして秋には牛田さんのソロコンサートを倉敷市で開催の予定でしたが、あいにくコロナ禍の為に中止になってしまいました。牛田さん個人としてもたくさんさんのコンサートなどが中止または延期になりました。ついでには、くらしき作陽大学の研究生OBとして、牛田さんが指導を受けたモスクワ音楽院の教授陣が教える「モスクワ音楽院特別演奏コース」で現在学んでいる学生と今後学びたいと思っている高校生のみなさんへ、現状のような困難な時期の中でも音楽を学んでいくことについてのメッセージなどをお願いただければ幸いです。

いま世界はウィルスの影響で混沌としています。誰もが幸せで平和な毎日を送ることは難しくなりました。そんな中で、クラシック音楽をはじめとする伝統芸術の存在意義が疑われ始めることとはもしかしたら当然のことなのかもしれません。しかしこういった伝統芸術は、人間が過去に経験した感情、また文化や歴史を言語を超えて語り継ぐ意義深いものです。また特に19世紀以降のクラシック音楽の多くは、ショパンが当時ポーランドの農民が格差社会のなかで奴隷のような扱いを受けていたことに対する反発からマズルカを作

曲したように、シオスタコーヴィチは過剰な社会主義への批判をにじませて交響曲を作曲したように、「自由」「博愛」「平等」「平和」をはじめとする我々が守り続けなければならない重要な価値観や哲学と強く結びついています。難しい状況下においてもこの偉大な芸術を質の低下や過剰な商業主義に陥ることなく継承していくことは、一見無意味なようであっても、長い目で見ればまわりまわって我々に豊かさや幸福をもたらすものだと思っています。いつかみなさんと一緒に仕事ができたら嬉しいです。

MESSASGE

“いつかみなさんと一緒に仕事を”